

カズオ・イシグロの作品におけるアメリカ大衆文化の受容

荘中孝之

イシグロとアメリカ大衆文化

イシグロは2017年12月7日にストックホルムで行われたノーベル文学賞受賞記念講演において、これまで自分の作品が様々な面で音楽から影響を受けてきたと述べ、多くのアメリカ人ミュージシャンの名前を挙げている。そのうちの一人で七〇年代のアメリカン・ロックを代表する、作詞家としても評価の高い Jackson Browne の曲に、“Sorrow of Fountain”というタイトルのものがある。そこでは“Now the things that I remember seem so distant and so small / Though it hasn't really been that long a time / What I was seeing wasn't what was happening at all”と歌われるのだが、これは終始記憶の曖昧さを描いてきたイシグロの作品に通底する、人の認識の不確かさを表現するものと捉えられる。例えばイシグロの長編第一作 *A Pale View of Hills* (1982) の第3章冒頭には、イギリスに住む主人公の女性 Etsuko が、昔長崎で起こったある出来事を思い出して次のように語る場面がある。“It is possible that my memory of these events will have grown hazy with time, that things did not happen in quite the way they come back to me today.” (41) もちろん過去の事実は変わらないわけであるが、それが人の記憶の中にしかないとすれば、思い出す時の状況次第でその事実は如何様にも変容してしまうものだというのを、このようにイシグロは繰り返し描いてきた。それは Jackson Browne がこの曲で、次のように端的に表していることでもある。“And all the future's there for anyone to change / Still you know it seems it would be easier sometimes / To change the past.” この曲が収録された Browne のアルバム *Late for the Sky* が発表されたのが、イシグロがちょうど二十歳の頃の1974年であり、彼が最も音楽活動に没頭していた時期である。その三年後の1977年にイシグロが書いた“Old Sixties Records”という曲では、“Old hearts and memories”、“Old friends and memories”、“Old dreams and memories”と、その後のイシグロ文学の重要なキーワードとなる“memories”、「記憶」という言葉が三回も繰り返されている。このように彼はアメリカ音楽から多大な影響を受けつつも、早くから自分のテーマを模索し、確立しつつあったことが示されている。

さらにイシグロが若い頃アメリカの音楽に傾倒していたという事実は、彼の作品を語るうえで重要な意味を持っていると思われる。イシグロ自身が証言するように、彼が十代や二十代を過ごした六、七〇年代のイギリスが、アメリカ文化に大いに影響を受けていたというのは確かである。六〇年代にアメリカで起こったヒッピー・ムーヴメントは、カウンターカルチャーの一つとして世界中に影響を与えた。しかしもちろんイギリスの若者がすべてアメリカを向いていたわけではない。1966年4月、アメリカのタイム誌は当時の華やかかなりイギリス文化を取り上げ、その表紙に“London, The Swinging City”というタイトルを付けた。六〇年代に世界中を席卷した The Beatles があの歴史的名盤といわれる *The Sergeant Pepper's Lonely Hearts Club Band* を発表したのは1967年であるし、彼らと並んで The Rolling Stones や The Who といったイギリスのバンドがアメリカのヒット・チャートを独占した、British Invasion と呼ばれる現象が起こったのもこの頃である。つまりこの時代のイギリス音楽は流行の最先端を行くものだったわけである。しかしイシグロはそこで自国のものにはあまり興味を示さず、アメリカの文化に憧れを抱く。その後彼は自分のルーツを探るかのよう、小津や成瀬などの日本映画に没入していった。イシグロ自身、柴田元幸との対談で「二十代に入ってから、映画をはじめとして、急に日本に目が行くようになった」、そして「日本文化とは違って、アメリカ文化を吸収することは、イギリス人になるプロセスの一部であったと思う」と述べている。逆説的ながらこうして彼は日本でもアメリカでもない、自身の中のイギリス性というものを峻別していったのではないだろうか。

また彼が Jackson Browne や Tom Waits といったミュージシャンを特に好んでいたという点にも、注意を払ってよいかもしれない。彼らは自国の最先端を行く者たちと違って、どちらかといえばオーソドックスなタイプのミュージシャンである。イシグロが思春期を過ごしたイギリスの六、七〇年代といえば、Pink Floyd や King Crimson といったプログレッシブ・ロック、あるいは Sex Pistols、The Clash といったパンク・ロックが流行していた時期でもある。しかし彼はそれらには関心を示さず、アメリカの古典的なロックを好んで聞いていたのである。それは後年の小説家としてのイシグロの指向性を表しているように思われる。つまり文学においても言語的な実験などには興味を示さず、たとえ *Never Let Me Go* のように一見奇抜な設定であっても、記憶や愛こそが死に対峙することができるというような、古風とも言えるテーマを徹底的に追求しようとする彼の作品の傾向と合致するところがあると言えるのではないだろうか。

イシグロと父

そしてイシグロが大変な音楽愛好家であることは、彼の父からの影響も無視できないと思われるが、そこには「潮の流れ」が関係している。イシグロが生まれる前年の1953年に、暴風雨と高潮が重なってイギリス東部沿岸に甚大な被害をもたらすという災害が起こり、1950年代半ばから英国政府は波浪の研究に力を入れ始めていた。そこで英語でも潮流解析などに関する論文を数多く発表していたイシグロの父、鎮雄の研究がイギリス政府の目に留まり、彼は息子がまだ五歳の1960年に一家で渡英することになる。またこの父自身はアメリカとある程度深い繋がりのある人物であった。彼の研究のいくつかはアメリカに対する、あるいはアメリカとの軍事的な研究に関わっている。一時カリフォルニア大学に留学していたこともある鎮雄が、イシグロ家にアメリカの文化を多少なりとも持ち込んでいたであろうということは想像に難くない。

その父はまた熱心な音楽家で、いつもピアノを弾いており、イシグロが子供の頃はよくその音で起こされたということである。バッハやショパン、ベートーベンなどクラシックが好みだったようだが、彼が長崎の气象台に勤めていた時はそのテーマ曲も作曲しているし、晩年に至るまでずっと曲作りに励むなど音楽から離れることはなかった。つまり音楽はこの科学者にとって、単なる趣味以上のものだったと思われる。イシグロ自身も「音楽はもともと好きで、ピアノは5歳のときから習い始めましたし、町の聖歌隊の一員としてちょっと有名だったこともありました」と述べている。このようにジャンルは違えども、父から受け継いだ趣味や嗜好というのも確実にあったのではないだろうか。確かにその分野で身を立てることができなかったとはいえ、彼自ら「音楽をやったことは小説を書くいい訓練になりました。1つの曲を書くために何週間も、時には何カ月もかかって、それでも完成しないこともある。自分一人でしかも長期間集中して仕事をするこゝになれることができましたから」とも語っているように、音楽制作は小説家イシグロを形成する土台の一部となっているようである。また彼と親交のある村上春樹が2019年にイタリアの文学賞を受賞した際に記念講演で、「リズムが文学においても不可欠であり、大学を卒業してジャズバーを経営していた頃に、店に立って昼夜聴いていた音楽が小説家になるための訓練になっていた」と語っているように、イシグロにとっても作詞や作曲だけでなく、音楽を聴くということが彼の作家としての重要な原点となっているかもしれない。

イシグロのこうした興味や関心に一定の影響を及ぼしたと考えられる父の存在が、彼自身認めるようにその考え方自体にまで大きく作用しているようだ。父が開発した高潮を予測する機器は、近代のイギリスにおける重要な科学的成果の一つとしてロンドンのサイエンス・ミュージアムに展示されているが、ロック・ミュージシャンを目指してアメリカを放浪したりしていた若い頃のイシグロにとって、その父は越えようにも越えられない、大きな存在であったに違いない。イシグロが2015年に発表した作品のタイトルは *The Buried Giant* というものだったが、その出版の数年前に亡くなった父こそがまさに彼にとっての「埋められた巨人」なのではないだろうか。

以上イシグロとアメリカ大衆文化、特に音楽との関係をいくつかの角度から考えてきた。このように彼にとってアメリカの音楽とは非常に重要な存在であるわけだが、彼はまた世界中の読者を想定して英語で書く作家として、その言語や文化の帝国主義的側面について大いに懸念を表明している。今後もイシグロとアメリカ、そしてその大衆文化との微妙な関係を見続けていくことは、この作家を研究するうえで興味深い視座を与えてくれるように思われる。

参考文献

Browne, Jackson. *Late for the Sky*. Asylum Records, 1974.

Ishiguro, Kazuo. *A Pale View of Hills*. Faber & Faber, 1982.

----- *My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs*. Faber & Faber, 2017.

Shaffer, Brian W., and Cynthia F. Wong, eds. *Conversations with Kazuo Ishiguro*. UP of Mississippi, 2008.

Whiteley, Sheila. "British Popular Music, Popular Culture and Exclusivity." *The Cambridge Companion to Modern British Culture*. Michael Higgins et. al. eds. Cambridge UP. 2010. 262-278.

板垣麻衣子「村上春樹さん、イタリアの文学賞で講演」『朝日新聞』2019年10月20日朝刊、29面。

小栗一将「石黒鎮雄博士の業績—観測機器・実験装置の開発とアナログコンピューティングによる海洋現象解明のパイオニア」『海の研究』27(5), 2018. 189-216.

柴田元幸「Interview カズオ・イシグロ」『Coyote』No.26, 2008年4月号. 40-43.

スイッチ編集部「Sydenham's Voice—カズオ・イシグロの居た場所、居る場所を垣間見る、データファイル」『スイッチ』1991年1月号. 99-102.

平井杏子『カズオ・イシグロの長崎』長崎文献社、2018年。

福岡伸一『動的平衡ダイアログ—世界観のパラダイムシフト』木楽舎、2014年。